

※18.

胃癌の肝転移成立における接着分子の意義
東京医科大学外科第3講座, 同病院病理*

○園田一郎 青木達哉 鈴木和信 葦沢龍人 高木 融
山崎達之 鈴木敬二 長手基義 小柳泰久
芹沢博美* 海老原善郎*

【目的】 癌の転移形成には異種性接着(heterophilic interaction)が関与し癌細胞と血管内皮細胞におけるセレクチン、癌細胞と細胞外マトリックスにおけるインテグリンなどが判明してきている。

今回、胃癌肝転移症例における可溶性接着分子及びサイトカイン、腫瘍マーカー等を測定し、胃癌の肝転移成立に及ぼすこれらの意義を検討し、若干の知見を得たので報告する。

【対象及び方法】 胃癌非肝転移群(A群)10例、同時性肝転移群(B群)14例を対象とし非担癌者(C群)6例をcontrolとした。これら3群のICAM-1,VCAM-1,ELAM-1等の接着分子、リガンドのLFA-1,Sialyl Le^x、サイトカインのIL-6,IL-1-β,TNF-α、腫瘍マーカーのCA19-9,CEA等を測定し、各群間の比較検討を行った。

【結果】

	A群	B群	C群
ICAM-1	238.6±41.9	767.4±689.0	250.2±46.3
VCAM-1	635.3±181.8	1184.4±465.9	724.2±140.5
ELAM-1	29.2±13.0	56.5±38.0	52.0±24.9
Sialyl Le ^x	22.4±5.4	164.8±197.0	24.6±3.6
IL-6	4.2±0.4	19.1±23.1	4≥
IL-1-β	14.7±6.8	12.5±5.2	10.6±1.3
TNF-α	5≥	7.8±103	5≥

ICAM-1,VCAM-1,ELAM-1,Sialyl Le^x,IL-6の各々は同時性肝転移群において他群に比し有意に上昇していた(p<0.05)。

一方、IL-1-β,TNF-α,CA19-9,CEA等に有意差は認められなかった。

【結語】 胃癌の肝転移成立においてICAM-1,VCAM-1,ELAM-1等の接着分子の関与が強く示唆された。

※19.

卵巣卵黄囊腫瘍における類肝細胞様分化
—超微細形態的検討—

(産婦人科) ○堀 量博 鈴木康伸 高山雅臣
(久留米大・産婦人科) 岩永成晃 薬師寺道明

卵黄囊腫瘍(york sac tumor)は、胎生期の体外胚組織である、卵黄囊を模倣する腫瘍を意味し、卵巣や精巣などの性腺におもに見られる腫瘍である。形態的には特徴のある多彩な組織像を呈し、機能的にはα-フェトプロテイン(AFP)を産生する興味のある腫瘍である。1959年、Teilumが卵黄囊腫瘍の概念を提唱して以来、いくつかの亜型が報告されてきたが、1982年Scullyらは肝への分化を混在するhepatoid york sac tumorを報告した。これはヒト二次卵黄囊が原腸を経て消化管上皮や肝へと分化することに基づいており、CohenらやUlbrightらも、原腸や腸管への分化を混じる卵黄囊腫瘍を報告している。今回、我々はhepatoid york sac tumorとは分類し得ない、通常の卵黄囊腫瘍のなかにも、肝細胞の小集簇を認めることを電顕的観察により証明することができたので、ここに報告する。